

# 若き日の上代タノにみる明治期の女子教育

——その展開と限界——

島 田 法 子

はじめに

この小論は、日本女子大学第六代学長上代タノの誕生からアメリカ留学に至るまでの若き日に受けた教育のあとをたどる。すなわち、その幼少期の学校教育から、松江市女学校、日本女子大学校英文学部を経て、アメリカ留学に至るまでをたどるものである。特に上代の外国への関心—とくに英語とキリスト教への関心—の芽生えに注目している。また同時に明治期の女子教育のケーススタディとしてその特質の一端を探る。

## 1 われ故郷を愛す

上代タノは中国山脈の山間の大東町にある浄土真宗大谷派宗専寺の墓地に眠る。上代はキリスト者であったが、死後は郷里の地に眠りたいという彼女の願いを、甥にあたる筒井英雄氏（筒井家は姉きえの婚家）が受けとめて、その菩提寺に墓を設けたからである。丘の上にある筒井家の墓と並んだ上代の墓石は、彼女自身が生前選んで墓碑銘を刻んで準備していたという<sup>1)</sup>。楕円形の自然な形の墓石の表には「上代たのの墓」、そして裏には「故郷を愛す、日本を愛す、世界を愛す」と刻まれている。

上代は大変故郷を愛した。故郷への思いを示すエピソードに、大東高等学校に設けられている「上代文庫」がある。上代は故郷の高等学校図書室に十分な本がないことを耳にして、昭和35年から47年まで絶え間なく本を寄贈し、さらに46年に60万円、47年には40万円の運営基金を寄託した。昭和61年現在で上代文庫は1300冊を数えたという<sup>2)</sup>。筒井氏の記憶によると、上代は夏休みには必ず故郷に戻った。そして母や、結婚している姉妹の婚家を訪ねて泊まっていたという。目立たないように静かな休息の時間を故里ですごして英気を養い、秋には重責の待つ東京へ戻ることを常としていたようである。上代の生い立ちを、彼女が生涯愛した故郷出雲における子ども時代から追ってみたい。

上代は1886（明治19）年7月3日、島根県の大東町大東下分村（後の大原郡<sup>はるえ</sup>春殖村大字大東<sup>しもぶん</sup>下分、現在の大東町春殖）に、上代豊三郎、わきの次女として生まれた。父豊三郎は1858（安政5）年11月15日生まれで、1918（大正7）年11月1日に没している。母わきは同じく1858

年の2月15日に隣村の用賀村で上代市兵衛の長女として生まれ、豊三郎とのあいだに4男3女をもうけた。タノは5番目の子であった。

大東町は旧出雲国のほぼ中央にあり、周囲にはさまざまな神社や出雲伝説にまつわる遺跡がある。非常に信心深い土地柄で、また神話と伝説のお国柄でもある。上代が生まれる少しまえ、「神だったか仏だったかが、母わきの夢枕に立った」という。いかにも神話の国らしいエピソードである。そして生まれてくる子供に関するお告げがあった。「こんど生まれるのは女の子である。女だからといって決して粗末にしてはいけない。その子のはちに大きなことをするようになる」と。母はこの言葉で目がさめた。そしてそのお告げを信じて、近くの海潮温泉や、玉造温泉<sup>うしお</sup>に行き、養生をかさねたという。お告げの通り女の子が生まれた。上代はきっと「のちに大きなことをする」というお告を母から聞かされて育ったに違いない<sup>3)</sup>。活発で向上心あふれる人物になった一因は、幼少期の育ち方にあったのかもしれない。1929年出版の『島根縣人物誌』は上代を、「天資英明にして快活、出雲婦人に珍らしいテキパキとした女丈夫」と形容している<sup>4)</sup>。

現在の大東町は松江市のベッドタウン化している。山陰本線の宍道駅<sup>しんじ</sup>で木次線<sup>きすき</sup>に乗り換えて10分ほどで出雲大東駅にいたる。松江の町から30キロ余りの道のりを中国山脈に向かって入った所で、北部・東部・南部を標高30-800メートルの山々に囲まれた盆地のような地形で、町の70パーセントが山地という静かな農山村である。村を横切って斐伊川の支流である赤川が西に流れている<sup>5)</sup>。上代の生家の前には赤川に注ぐ支流が流れており、今も豊かな流れが見られる。上代は子供の頃、赤い腰巻をその辺の草原に放り出して、赤川でよく泳いだという。水泳は得意であった。尋常小学校に入ってから川原遊びは続き、放り投げておいた弁当箱をいくつもなくしたという<sup>6)</sup>。これもいかにも上代らしいエピソードだ。

上代の生い立ちを理解するために、明治期の春殖村について少し述べておきたい。『大東町誌』によれば、現大東町に含まれる6町村のうち、春殖村の人口は、1876（明治9）年には1,871人で、1920（大正9）年には1,987人であった<sup>7)</sup>。さらに1876年当時、春殖村の一部である大東下分村の趨勢は、戸数143、神社2、寺1、人口609、舟2、人力車3となっている。舟とあるのは、赤川の水運のためであろうか。赤川はかなりの水量を持っており、上代8歳の1894（明治27）年には大洪水をおこし増水4メートルに達したという記録がある。人力車は当時の贅沢な交通手段で、周辺の町村で他に人力車を持っていたのは大東町だけである<sup>8)</sup>。すなわち、大東下分は大原郡の中では比較的中心部にあり交通の便を持っていた地区であったことを示している。同じく1876年の時点で、大東下分村の職業分布は、全143戸のうち、農業72戸、工業30戸、商業37戸で、農業が中心産業であった<sup>9)</sup>。農業では米作が中心ではあったが、明治30年頃からは大東茶の名声があがって増産されるに至った<sup>10)</sup>。また1898（明治31）年に大原郡公立養蚕伝習所が設置され、1900年から1908年にはイギリスからデボン牛を続々輸入して牛種改良がなされ、産業の多角化が図られたようである。

上代家は大東下分村の庄屋の家柄であった。1869（明治2）年の版籍奉還で、旧藩主は明治政府に任命されて知事になり、伝統の庄屋制はそのまま採用されたから、祖父の上代喜八郎は明治初期の村の指導者であった。県制度が確立するまで、出雲国は分割と併合を繰り返すが、1881（明治14）年の統廃合によってやっと現在の島根県が生まれた<sup>11)</sup>。市町村レベルでも、行政区画がたびたび変更され混乱をきたしたが、1885（明治18）年8月、現大東町には大東村、清田村、

大東下分村、任和寺村、下佐世村、東阿用村、諏訪村の7行政区画が設置され<sup>12)</sup>、大東下分村のブロックには、大東下分村や用賀村など5村が置かれた<sup>13)</sup>。上代タノが誕生したのはこの時期である。

さらに3年後の1888(明治21)年4月には町村制が公布され、翌年実施された。改めて町村合併が行われ、町長、村長が置かれるようになった。現大東町には、大東村、春殖村、幡屋村、佐世村、阿用村、海潮村の6村が設けられ、それまでの旧町村名は大字名になった。すなわち大東下分村は、春殖村大字大東下分となった。春殖村には、旧5村が含まれ、村役場は大東下分に置かれた<sup>14)</sup>。さらに1896(明治29)年8月、郡制施行となり、大原郡役所が大東村に設置された。

1889年に施行された町村制規定で、町村長は議会で選挙されることになった。村長はその村を統括、代表する地位を与えられ、村議会の議長になった。村長は、条例で有給にすることもできたが、基本的に名誉職であった。「当時の町村長はほとんどが名誉職であり、助役・収入役また職員も、その大部分が町村内の顔役あるいは以前の庄屋年寄・戸長または用掛を勤めた人格見識共に優れた人々であった」<sup>15)</sup>。春殖村の役職者リストによれば、父上代豊三郎は、第1回総選挙があった1889(明治22)年6月には、30歳で、春殖村の助役・収入役兼任として顔を出している。2年後3月の選挙では村長に選出され、1897(明治30)年11月まで勤めている。さらに10年後の1907年に再び村長に選出されて、1911年4月まで勤めている。また春殖村村会議員リストによると、上代豊三郎は、1889(明治22)年の総選挙で当選してから1910(明治43)年まで7期連続当選し、再び1913(大正2)年の総選挙で当選して、2期連続して1918(大正7)年に没するまで村議会議員として名をつらねている。これは上代タノが3歳から31歳までの期間に相当する<sup>16)</sup>。

上代は両親に関して「私の両親は二人とも非常にリベラルな考え方をする人たちで、日本の将来の発展のためには教育こそ第一に重要だと信じていた」と書いている<sup>17)</sup>。父上代豊三郎は、いわゆる部落出身の人々の福祉にも配慮する、当時としては気持ちの大きな人物であったという<sup>18)</sup>。女子教育に関しても進歩的な考えを持っていたようで、タノだけでなく、2歳年下の妹のキクノも松江高等女学校を卒業している。当時娘を女学校に進学させるには、女子教育に対する信念だけでなく、授業料と寄宿舎費用という相当の出費の覚悟がなければならなかった。上代が入学した明治33年の松江高等女学校4ヵ年の授業料総額が83.5円、経費総額が470.4円となっている。卒業した36年では授業料総額187.5円、経費総額は667.0円であった。4年で667円かかるなら、月平均約14円となる。上代が36年に大東尋常小学校の准教導としてもらった給料が月14円である<sup>19)</sup>。上代家は旧庄屋で豊であったとはいえ、県の資産家リストに顔を出すほどの資産家ではなかった。娘たちを高等女学校に進学させたのは、女子教育に相当の理解があったということである。

一方母わきは、儒教的な考え方も持っており、上代は厳しく躰られた。たとえば上代と妹は二人とも気の強い子でよく喧嘩をしたが、母はいつも「姉は妹を教育しなければならない」といって上代を叱り、衿くびをつかんで庭の大きな土蔵に押し込めて折檻したと言う。上代は「土蔵には蛇がいたのでとても怖かった」と述懐している<sup>20)</sup>。上代はこのような恵まれた環境ですくすく育った。活発なはず娘だったらしい。そして1893(明治26)年4月、6歳で

大東下分尋常小学校に入学した。

当時の大東町の初等教育について短く言及しておきたい。1872（明治5）年の学制頒布によって、翌年から翌々年にかけて、現大東町には小学校が12校開設されたが、そのほとんどが寺や神社に置かれ、寺子屋時代から引き継いだものであった。1873年、新制度による初年度の全国就学率は28.13%（男子は39.9%、女子は15.14%）で、その後も就学率の上昇は緩慢で、やっと1891（明治24）年に至って全国就学率は50%を越した。就学率が90%に到達したのは1902（明治35）年である。その10年後には98%となる。辺地では就学率が、特に女子の就学率が低かった。大東町では1881（明治14）年ごろの調査で、男子は45%、女子はたったの5%が姓名を自記できたという記録がある<sup>21)</sup>。

大東下分村には1874（明治7）年、飯田小学校と山田小学校が設立されたが、いずれも寺子屋をそのまま引き継いだものであった。1880（明治13）年になると、公立稲守小学校が大東下分地区の民舎に創設され、その5年後に同じ敷地に新たな校舎が建てられて大東下分小学校が開校された。大原郡内で最初に建築された小学校であった。その翌年上代が誕生している。同校は翌々年に大東下分尋常小学校となった。1890（明治23）年の学制改正大要によって、全国の尋常小学校は4年制の義務教育となり、公立小学校は授業料を徴収しないことになった。その後大東下分尋常小学校は、1891年に春殖尋常小学校と名称を変え、1892年には春殖村大東下分尋常小学校となった<sup>22)</sup>。

上代が入学したのは尋常小学校が義務教育となったこの頃であった。勉強がよくできたので、尋常小学校は4年制であったが、3年と4年の授業を一緒にやって1年早く1896（明治29）年3月に卒業し、大東高等小学校に進学した<sup>23)</sup>。

大原郡に高等小学校が設置されたのは、1887（明治20）年である。同年、「島根県小学校設置に関する規定」が定められ、高等小学校が各郡役所の所管内に1校以上設置されることになった。そこで大原郡高等小学校（修業年限4年）が、現在の大東高等学校校地に設置されたのである<sup>24)</sup>。上代は9歳で大東高等小学校に入学し、4年後に13歳で卒業した。

高等小学校時代の上代のエピソードに、海との出会いがある。上代は遠足で初めて海を見た。あまりの感動で口もきけずに海を見ていて、がま口と手ぬぐいを落とし、担任の先生からお小遣いを借りてしょんぼりして帰ったという。情景が目には浮かぶようである。母はこういうときには決して叱らなかったという<sup>25)</sup>。上代が海を渡るのは15年後のことである。

## 2 松江高等女学校時代—外国との出会い

上代は13歳の春、両親の理解を得て、松江市高等女学校2年に編入学した。松江市高等女学校は、日清戦争勝利後の1895（明治28）年に国が定めた高等女学校規程に則り、島根県の補助を受けて1897（明治30）年に設置された島根県で最初の公立高等女学校である<sup>26)</sup>。全国的にみても、これ以前に設立されていた高等女学校レベルの女子教育機関は官立1校、公立12校、私立6校を数えるに過ぎなかったから、松江市高等女学校は早い時期の設立であったといえよう。松江市高等女学校と同年に開校された公立高等女学校は全国に7校あった。その後、各県に最低1校設置することを国から指示されたために急激に増え、1907（明治40）年には100校を越え

た<sup>27)</sup>。日本の国力向上に伴ってそれまで看過されてきた女子中等教育の充実が求められたのである。

松江市高等女学校の場合は、尋常小学校卒業・高等小学校2ヵ年修了者を入学させる本科4ヵ年課程と補習科1ヵ年課程を基本としていた。上代は高等小学校4ヵ年を卒業していたので本科3年次に編入学できたのだが、数学の教師高橋トモに会ったときに女学校は2年次が大切だと言われて、2年次入学の手続きを取ったという<sup>28)</sup>。開校当時の学生数をみると、初年度125名、上代が入学した1900（明治33）年度には205名、上代が卒業した1902年度は242名となっている<sup>29)</sup>。初年度の学生の出身地と族籍の記録がある。本科生125名のうち、士族80名で平民45名。松江市内96名で市外からの学生が29名であった。すなわち当時は松江市内に住む士族の娘の中等教育機関という傾向があったといえよう。上代と同じ大原郡からは、平民が2名のみ入学している<sup>30)</sup>。

松江市高等女学校は、武家屋敷が多く残る母衣町<sup>ほろ</sup>にあり、一角に普門院があり、女学校はそれに連なって建っていた<sup>31)</sup>。構内には二つの教室棟のほか、教員室、音楽室、裁縫室、割烹室、体育室という建物群があり、廊下でつながれていた<sup>32)</sup>。開校当時の学生はいたって地味な服装で帯を締めて髪をいちょうがえしに結っていたが、1900（明治33）年から裁縫の先生に習って袴を作り、それを履くようになったというから、同年入学の上代も袴をはいて学生生活を送ったのかもしれない<sup>33)</sup>。松江市高等女学校は現在の松江北高等学校につらなるが、幸いなことに松江北高等学校に上代の学年の卒業写真が残っていた。背の高い大柄な上代は最後列で、袴をはいた級友たちと未来を遠く見据えた眼差しで写っている。

春殖村から松江の母衣町までは、徒歩でまる1日の道のりである。庄屋の娘とはいえ、学校と家の行き来は人力車ではなく、今も部分的に残っている細い田舎道をたどって歩いたことであろう。この距離では毎日の通学は不可能である。松江市外からの学生は学校の寄宿舎に住んだ。上代にとってはこれが親元を離れた自立の始まりであった。寄宿舎は、開校当時は学校の近くの民家を借りていたが、明治36年にお堀端の殿町に移転した<sup>34)</sup>。

松江はラフカディオ・ハーンをはじめ、多くの文化人に愛された町で、この女学校も創造的な校風と優れた教師に恵まれていた。当時一般の女子中等教育の教育理念であった良妻賢母主義とは一味違う校風をもっていたらしい。上代は当時を思い出し、「もし先生方の特徴を一言でいうとすれば、市立であったためか、当時の教育法としては珍しく型破りで、自主的・創造的であったことである」と述べている<sup>35)</sup>。学校の授業は詰め込み教育ではなく、学生は自分の考えを自由に発表し、思いきって質問することを奨励された。幼いときから気の強いきかない子であったが、このような教育のお陰でますます活発で物怖じしない人物になった。上代の生涯をつうじての率直に発言する習慣は、ここで養われたもののようである。この習慣は、単に教室内ばかりでなく日常生活にも当てはまる訓練だったようで、上代は校長の訓話を聞いて納得できないとき、校長室に押しかけて質問攻めにしたこともあったという。そのようなとき、教員はそばではあらして見ていたらしい<sup>36)</sup>。

上代は勉強熱心であった。とくに文学に興味を抱いた<sup>37)</sup>。また新しい知識を求めて自発的に勉強にとりくみ、たとえば寄宿舎の舎監の承認を得て、男子学生とともに島根県尋常師範学校の教師のところで国漢を学び、松江中学校の教師の家で生物を教わるなど、知識欲に燃えていたと

いう<sup>38)</sup>。

高等女学校時代の最大の収穫は「英語」との出会いであったかもしれない。男子の中学校では1876年にすでに外国語が主要科目の一つに加えられていたのに対し、女学校ではその導入が遅れていたが、ちょうど上代の入学直後の1901（明治34）年3月に文部省令で高等女学校令施行規則が制定され、外国語の導入が決まったのである。松江市高等女学校でも、1902（明治35）年、教育課程が改定されて英語が随意科目として導入された。逆に裁縫の時数は半分以下に大幅に減少した。上代は「英語」に飛びついた。母わきが、「日本はもう“内地雑居”が認められ、外国人はどこにでも自由に住み暮らせるようになった。だから外国語、なかでも英語は女の子もしっかりと勉強しておく必要がある」と、上代に常々言っていたためだという<sup>39)</sup>。日清戦争（1894-95）後に不平等条約が撤廃されると、外国人がかつてのように居留地に住むという限定がなくなり、松江にも外国人の姿が見られるようになっていたのである。上代が女学校で2年間だけにせよ英語に触れることが出来たのは、天の配剤であった。

上代が初めて英語を学んだ教師は鳥羽富貴という人物であった。松江北高等学校所蔵の鳥羽の履歴書によると、鳥羽は1870（明治3）年岡山県に生まれた。13歳から19歳までの6年間（1883-89年）、東京の築地にあった立教女学校<sup>40)</sup>に在学し、特に英語と唱歌を学んでいる。卒業後さらに1896（明治29）年までの7年間を宣教師 W. S. ウォルデンに師事し、英学、唱歌、料理法等を修業した。さらにこの間1892（明治25）年7月から1894年12月まで、ウォルデンに同行してアメリカ留学を果している。その後1896年11月から1897年5月まで横浜山手英和女学校、さらに同年9月から翌年4月まで横浜山手共立女学校<sup>41)</sup>で学んでこれを卒業した。再びウォルデンに学んだ後、1899（明治32）年9月から名古屋市立高等女学校教諭心得となり、1901（明治34）年4月には岡山県立高等女学校教諭心得として英語の教鞭をとった<sup>42)</sup>。1902年に松江に来たのは鳥羽が31歳か32歳のときである。興味深い人物であるが、残念ながらこれ以上の情報はない。プロテスタント系の学校に学び、宣教師に師事していることから、伝道と教育、福祉を専門とする当時のバイブル・ウーマンとしての訓練を受けた人物であったことが推定されるが、確証はない。

上代は、高等女学校時代の思い出の第一に鳥羽の英語の授業を挙げ、次のように述べている。

…母校は、思いがけない遠方から素晴らしい先生を迎えた。鳥羽ふき子先生です。先生が何故当時大変不便な松江に赴任されて、あれだけ熱心に英語を教えられたか、今になっては知るよしもないが、ただ一つ考えられることは、松江が早くから広く知られていたこと、殊にラフカディオ・ハーンがわざわざ松江を選んで移り住み、そこの中学校で英語を教えたこと、また、バックストンという有名な英国宣教師が出雲を選んで渡来、八年も長い間宣教に尽瘁したことなど、その頃まだ世人の記憶にも残っていて、クリスチャンであった鳥羽先生の興味をひいたかとも想像される。何はともあれ、私共鳥羽先生から教わった者にとっては大変幸せであった。<sup>43)</sup>

英語は週3時間の授業であった。当時の女学校規則によると、英語は1年次で読方、解釈、書方、習字を習い、2年次以上になると会話と文法、作文が加わるカリキュラムになっていた<sup>44)</sup>。

上代の記憶では、英語の授業は英語の歌や讃美歌が中心で、大きく口をあけて夢中になって歌ううちに、英語の音調の美しさや情緒を自然に体得していったという<sup>45)</sup>。ただ単に英語の知識を教える授業ではなく、生徒に英語の持つ魅力や、キリスト教を含めた海外の文化の香りを伝え、広く世界へ視野を広げる役割を果たしていたようである。上代は鳥羽の授業を高く評価してこう述べている。「先生の授業は、今日最も進歩した教授法に照らしてみても決して遜色ない立派なものであった。私共が先生から習ったことは一握りの英語でも自分の身にぴったりついた感じであった。その上、英語の音調の美しさや、底に流れる深い情熱まで心の底にしみこませて貰ったことを忘れることができない」と<sup>46)</sup>。

鳥羽はこのような生徒に慕われていたにもかかわらず、翌年春には松江を去っている。たった1年で松江高等女学校を辞めた事情は、残念ながら分からないが、松江を去って徳島へ移ったことが、彼女が所属した日本聖公会松江基督教会の「転入信徒名簿」の記録に残っている。それによると「鳥羽フキ」は「1902年〔明治35〕3月19日、東京三一教会より転入。1903年5月21日、徳島イマヌエル教会へ転出」となっている。鳥羽が転入した松江基督教会は1885（明治18）年創立で、松江で最も歴史が古く、上代が言及している宣教師B. F. バックストンが1891年から1902年（明治24-35年）にかけて11年間にわたって建て上げた教会である<sup>47)</sup>。バックストンは1902年3月にイギリスに帰国しているため、鳥羽とはちょうどすれ違いになっており、鳥羽が松江を去ったのもここに原因があるのかもしれない。

上代が初めてキリスト教に触れたのは女学校時代であった。興味深いことに、上代は松江でバックストン宣教師と出会ったことをよく記憶しており、次のように述懐している。「私は松江で初めて外国人に出会った。バックストンという名前のイギリス人宣教師であった。彼はよく公園で説教していたが、私はよくそれを聞きに公園に出かけたものであった。子どもらが彼に石を投げつけることがしばしばあった。私はそれを止めさせようとしたものだったことを思い出す」と<sup>48)</sup>。またクリスチャンの鳥羽に心酔していた上代が、キリスト教に好意を持ったとしても不思議ではない。

上代が女性問題に目を開かれたのも女学校時代であった。上代によれば、女学校4年生のとき、初めて『婦人新聞』を読み、掲載されていた下中弥三郎の「女子も男子と同じである。政治、社会、経済等の立場にたって働かねばならない」という議論に感銘を受けた。上代はこの感動を自分だけの胸におさめておけず、教師に頼んで、全校生徒総会のときに皆の前で「婦人と時局」という題で話し、喝采を受けたことがあったという<sup>49)</sup>。上代の面目躍如である。

1903（明治36）年3月、高等女学校を卒業すると、同校の補習科に進み、翌年卒業した。当時およそ四分の三の学生が本科卒業後、補習科に進んだ。補習科卒業者には准訓導の資格が与えられ、小学校の代用教員になることができた<sup>50)</sup>。上代は郷里に戻り、17歳で大東尋常小学校の准訓導となり1年間教鞭をとった。この小学校は、1873（明治6）年、寺子屋から公立大東小学校として出発し、1886（明治19）年に大東尋常小学校となった。1892（明治25）年に新校舎が現在地に移転・建築されているから、上代はその新校舎で教鞭をとったことになる<sup>51)</sup>。補習科を卒業したあと、小学校の准訓導となる者は多かった。

### 3 日本女子大学校時代—英文学とキリスト教受洗

松江高等女学校の卒業生のなかには、さらに上の資格を求めて東京女子高等師範学校に進学する者も、1898（明治31）年の第1回卒業生のときから毎年1名くらいはいた。当時は東京女子高等師範学校が唯一の女子高等教育機関であった<sup>52)</sup>。ところが1903（明治36）年の勅令で専門学校令が公布され、これによって1904年に日本女子大学校、女子英学塾、青山女学院英文専門科等が専門学校として認可され、続々と女子高等教育機関が設置されていった。上代は1905（明治38）年、18歳の春に、両親の薦めで日本女子大学校英文学部予科に進学した<sup>53)</sup>。東京女子高等師範学校ではなく、日本女子大学校を選んだ理由を、上代は次のように述べている。「このままで行けば当然、女子高等師範進学となるのだが、その頃、英語の勉強をもっと続けようと思うようになっていたのと、女学校の先輩である国頭<sup>くにとう</sup>ツネヨという人がさかんに日本女子大学校を薦めてくれたのが引き金となって、日本女子大英文科を受験しようと決めた」と<sup>54)</sup>。また、母の強い薦めで国際的活動の道をひらくために、家政学部ではなく英文学部を選択したという述懐もある<sup>55)</sup>。いよいよ出雲国を出て広い世界へ羽ばたくときがきたのである。

世界的な舞台へ通じる旅の始まりは、出雲から三日三晩かけての上京であった。19歳にして、一人で未知への旅に発ったのである。父は、大原郡の郡視学（今の教育長）に、娘の上京後のことをよく頼んだ。上代の思い出によると、「私の家は鉄道の駅からは遠く離れていたもので、近所の人たちは私に永遠の別れを告げているかのようであった」<sup>56)</sup>。当時はまだ山陰本線は開通していなかった（開業は明治41年11月）。石川ムメの聞き取りによると、上代はかつての大名参勤交代の道を人力車で山陽へ向かったようである。

当時、松江には汽車はなかったので、松江からは蒸気船で米子まで出て、そこで最初の日は一泊しました。そこから中国山脈の四十曲峠を人力車で越えて津山（岡山県）に出たのですが、急な坂道なので登るときは一人の車夫がうしろから押し、くだるときはうしろから引っぱって行くという有様でした。津山で一泊し、そこからこれも人力車だったと思いますが岡山まで出て、山陽線の汽車に乗りました。松江から東京の新橋駅までは三日がかりでした。新橋には郡視学の親友で、郷里の先輩にあたる早稲田大学の中村吉蔵教授（戯曲家坪内逍遙の門下生、近代劇運動の指導者）の親類の人が出迎えてくれました。<sup>57)</sup>

早稲田大学の中村吉蔵は、上代の保証人を引き受けてくれた人物である。

上代が予科に入学したのは、女学校における2年間のみの英語教育ですぐに大学レベルの授業についていくだけの英語力がなかったからである。予科で1年間みっちり英語を学んで、翌年英文学部に進学した。当時の英文学部の教授陣として、高橋一知、村井知至、松浦政泰、柳沢米、島田重祐、ミス・グリーン、ミス・フィリップス、ミス・ヒューズの名が挙げられている。1年次には実用英語を重点的に学び、2年次から文学を学び始め（テキストとして使われたのは *Enoch Arden and Others* や *Ivanhoe*）、3年次以降には文学中心の学びになった（テキストとして *King Lear*, *Wordsworth's Poems*, *Silas Marner*, *The Lady of the Lake* などが用いられ



た)<sup>58)</sup>。上代は当時の日本女子大学校を思い出して、「大学は創立から数年経っていたが、全般的にまだ新鮮でやる気を起こさせる雰囲気満ちており、この学校を選んでよかったと思った。私はその当時日本では全く新しいものだったリベラル・アーツ教育を存分に享受した」と述べている<sup>59)</sup>。

上代が住んだのは、日本女子大学校構内の寮ではなく、日本女子大学校から依頼を受けて学生を受け入れていた「外寮」と呼ばれるものの一つで、英文学部教授（英文学史と英会話担当）で英国聖公会福音宣教師であった E. G. フィリップスが経営する暁星寮であった。暁星寮は雑司が谷にあった。大学の寮ほど規則が厳しくなく、外国の料理など新しい文化の薫りがして、そのうえ英語力がつくというので、学生たち、とくに英文学部の学生たちの憧れの的であった。キリスト教伝道が目標とされたミッションの経営であったが、大学側は学外における宗教教育を肯定的に捉えて認めていた。上代より 19 年後輩の岡上千代氏の思い出によって、暁星寮の生活ぶりを知ることができる。

女子大の内寮はとっても行儀作法が厳しくて、いつも暁星寮がうらやましいっていわれました。暁星寮は家族みたいで暖かい雰囲気でした。英文学部の学生が多かった。暁星寮は人気がありました。

食事は質素でした。夕食のときには楽しく会話をするををしつけられました。西洋式のナイフとフォークの使い方も教えられました。私は洋食を知らなくて、高知にいたころは東京屋の親子丼が洋食だと思っていたくらいでした。…カレーが大好物になりました。他にもシチューなどが出ました。

暁星寮では、食事の前に必ずお祈りをしてからいただきました。それから、朝起きて朝食前と、就寝前に、祈りの部屋〔先生の書斎〕に皆が集まって、お祈りしました。十畳くらいの部屋で、みなぎゅうぎゅうにつめて座りました。先生が祈りました。週に一回は先生の書斎で聖書の勉強がありました。…日曜日にはほとんどの〔自分の宗教をもっていない〕人は先生と一緒に聖公会の教会に行きました。当時の学生は素直で先生の指導にそのまま従いました。<sup>60)</sup>

暁星寮では、フィリップスの聖書講義が有名であった。上代は例によって、フィリップスの講義に納得できないことには質問を繰り返した。上代とフィリップスの聖書論争は寮生たちのあいだでは評判になっていた。上代は、フィリップスが、議論に負けたときにはあっさり自分の解釈違いであったと認める率直さに感銘を受けた。一方フィリップスは、この変わった学生に特別の可能性を感じ、もっと知的に聖書を語れる知識人として新渡戸稲造にひき合わせた<sup>61)</sup>。上代は、新渡戸稲造夫妻の知遇を得てクエーカー主義に関心を抱くようになるが、フィリップスとの繋がりから聖公会の教会に出席し、1909（明治 42）年 12 月 24 日、クリスマス・イヴに、23 歳でフィリップスが所属する東京市牛込区矢来町の聖バルナバ教会において洗礼を受けた<sup>62)</sup>。

上代の学生時代は英語と英文学の勉強だけで明け暮れたわけではなかった。1906（明治 39）年に上代の保証人となった河井醉茗は東京日日新聞社に勤めていたが、この頃河井醉茗主宰の月刊『女子文壇』が創刊され、上代はその編集室でアルバイトとして働いた<sup>63)</sup>。最初は依頼原稿

を取りに行く仕事をしていたが、そのうちにこの同人誌に自分も寄稿するようになったという。仕事を終えて夕飯までに暁星寮に戻った。勉強は夜9時半頃までの勉強の時間に集中して行った<sup>64)</sup>。

また在学中、成瀬校長にかわいがられ、大隈重信への訪問にお伴したり、新聞界や政界の指導者とのインタビューに同席したり、ときには渋沢栄一の通訳を務めたりするチャンスを与えられた。当時の日本の指導者たちに接して大いに刺激をうけることになった<sup>65)</sup>。さらに、新渡戸邸を頻繁に訪問するうちに、新渡戸の図書や手紙の整理を手伝うようになり、新渡戸門下生の鶴見祐輔、田島道治、前田多門等と親しくなった<sup>66)</sup>。出雲国から出てきた女学生は、多くのエリートたちと面識をもち、様々な経験を積んで、大きく羽ばたく準備を重ねていたのである。

1910（明治43）年3月、23歳で日本女子大学校英文学部を卒業すると、4月から日本女子大学校英文学部予科で英語を教えることになった。上代は天性の教育者であり、教鞭を執ることを非常に楽しんだ。また成瀬が新渡戸と浮田和民の協力を得て、英語雑誌『ライフ・エンド・ライト』（*Life and Light*）を発行し始めたときにあたり、上代は英語力を買われてその編集をまかされることになった。上代によると「以前、酔茗先生から受けた教訓を唯一つの支えに、身の程知らずの重い責任を引き受けた」という<sup>67)</sup>。同時に上代は成瀬校長と強い結びつきを持つようになっており、成瀬校長の私設秘書のような立場で、無給で学校の校務に奉仕するようになった<sup>68)</sup>。

上代の本音はさらに進学することを希望していた。卒業後も英文学の研究を続けていた上代は、東京帝国大学に聴講生としてでもよいから進みたいと願ったが、当時は女性にたいして門は堅く閉じられていた。また女性の海外留学は、ミッション系の学校の特別に優秀な学生を除き、非常にまれであった<sup>69)</sup>。上代にアメリカ留学の道を拓いてくれたのは、新渡戸稲造であった。1912（明治45）年夏、たまたま交換教授として講演をしつつアメリカの諸大学を巡回していた新渡戸の斡旋で、ニューヨーク州の女子大学ウェルズ・カレッジから特別の奨学金を授与され、入学を許可されたのである<sup>70)</sup>。しかし折悪しく成瀬校長が海外視察を計画していたときで、成瀬から留守中は「学校の面倒をみて欲しい」と依頼され、上代は留学を1年延期することを決意した。「もちろん私はすぐにも発ちたいと、とても強く思ったけれど、忍耐することを決意」したのであった<sup>71)</sup>。

成瀬校長の留守中に、上代はある貢献をした。1912（明治45）年、文部省の英語科中等教員検定試験に合格したのである。初めは海外留学が決まっていたので受験しないつもりでいたが、学校側から「英文科の後輩のために是非受験しておくように」と言われ、「あえて受験勉強はしませんよ」と宣言して試験に臨んだ。「答案は勝手気ままに書いて提出した。それどころか、この朝は娘ながらに朝寝坊をしてしまい、人力車で駆け付けるといった有様であった。着ていた羽織なども普段着のひどいもので、渡米してから以降はおしゃれで通っている上代さんの面影などそのときは捜しようもなかった。いよいよ面接というとき、一緒に試験を受けていた森田松栄（社会運動家、山川菊枝の姉）が『それではあんまりよ、私の羽織を着ていらっしやい』といって貸してくれたりした」という。翌年は、「日本女子大始まって以来の語学の天才といわれた小山順子が受験した。まじめで努力家の彼女は、実力十分でゆうゆうと検定試験に合格した」<sup>72)</sup>。この二人の合格によって日本女子大学校の英文学部の力が改めて見直された。これがきっかけと

なり、その後文部省によって1924（大正13）年に21回生が4年生の時、無試験検定の中等教員資格が与えられることになった<sup>73)</sup>。

### おわりに

こうして上代は1年待って、成瀬と入れ替わりにアメリカへと旅立ち、新たな一步を踏み出したのである。学費と生活費はウェルズ・カレッジを通して支給されたが、渡航費は当時まだ健在であった父豊三郎が工面した。太平洋を船で渡り、アメリカ大陸を汽車で横断した上代は、1913（大正2）年9月ニューヨーク州北部の湖水地帯、フィンガーレイクスのひとつであるカユガ湖のほとりのウェルズ・カレッジに到着した。27歳になっていた。

上代が述べているように、上代は英文学を学ぶために東京帝国大学に進学したかったのであるが、当時帝国大学は女性には門を閉じていた。上代が留学を終えて帰国した後、東京帝国大学は女子の聴講生を受け入れ始めた。上代の後輩たち、日本女子大学校15回生の板垣（平山）直子は1920年、1922年には17回生の大原（田村）恭子等が続々と聴講生になった。大原恭子は1924年に東北帝国大学法文学部に進学して文学士となった<sup>74)</sup>。上代の場合には、日本女子大学校のような専門学校を卒業後、さらに学問を極めるには、海外留学が唯一残された道だったのであり、当時はアメリカの女子高等教育機関が、日本人女性の高等教育をするという構図があったのである。さらに英文学を専攻する上代にとっては、イギリスかアメリカに留学することは夢でもあり必要でもあった。新渡戸稲造というよきメントルを得ていたことが、彼女にアメリカ留学の道を拓くことになったのである。

上代のケーススタディによって、当時高等教育を望む女性たちの前に立ちはだかった壁と、その壁に立ち向かっていった女性のなかのエリートたちが辿った道の一端をうかがい知ることができるといえよう。第一に、上代は女子中・高等教育に関する諸々の法的措置の成立を追いかけるようにしてその恩恵を受けたが、大学・大学院に進学する道が閉ざされていた世代に属していた。すなわち上代は、1895年に高等女学校規定が定められて1897年に松江市高等女学校が開校してから3年後の1900年に入学し、1901年の高等女学校令施行規則によって教育課程が改正されるとともに新設された教科である英語教育の恩恵にあずかった。そして日本女子大学校が1901年に創立され1903年に公布された専門学校令によって専門学校として認可されてから4年後の1907年に入学している。しかし帝国大学の門は上代の前に閉じたままであった。第二に、帝国大学に拒まれた上代が海外留学に活路を得たのは、恵まれた条件が満たされたからであった。上代が海外で大学院教育を受けることができたのは、経済的に恵まれた生い立ち、理解ある両親の支援、日本女子大学校入学後に得た知己、特に成瀬仁蔵と新渡戸稲造という指導者とのめぐり合いという、特別な条件が整ったからだといえよう。上代は少数のエリートの一人であった。そして第三に、上代のケーススタディの中に、当時キリスト教が日本の女子教育にいかに影響を及ぼしていたかを垣間見ることができる。高等女学校時代の鳥羽富貴（鳥羽が学んだプロテスタント系のミッションスクールと宣教師も含めて）、日本女子大学校の暁星寮時代の恩師E・B・フィリップス、そして大学卒業後も続いた新渡戸稲造という、キリスト教の影響が継続して見られることが興味深い。外国語、外国文学を志した女子学生は、女子教育を通して布教を図ったキリス

ト教の諸宣教団の影響をとくに受け易い立場にあり、上代がその恩恵を受けたのは当然の帰結ともいえようか。

#### 註

- 1) 筒井英雄インタビュー，松江市にて，2001年3月6日．上代家の菩提寺は春殖・用賀にある臨済宗円妙寺である．上代家の墓は，上代家の裏山にあった．上代も自分の墓石をそこに置くことを考えていたのかもしれない．しかし上代家の宗教上の事情のため，墓石を納めることができなかったもののようである．晩年の上代は筒井家のほうに近い関係にあった．筒井英雄氏は，目白の成瀬講堂で持たれた大学葬に列席し，上代の遺骨を故郷に持ちかえた．
- 2) 「大東高らいぶらりい」第93号，島根県立大東高等学校，61年9月22日発行．
- 3) 東京都『名誉都民小伝』（東京都生活文化局コミュニティ部，1982），87頁．
- 4) 妹尾正義編『島根県人物誌』（島根縣人社，1929），101頁．
- 5) 平凡社地方資料センター編『島根県の地名』日本歴史地名大系第33巻（平凡社，1995），420頁．
- 6) 『名誉都民小伝』，88頁．
- 7) 大東町誌編纂委員会『大東町誌』（大東町，1971），19頁．
- 8) 『大東町誌』，100頁．
- 9) しかし大原郡全体のなかでは，工業と商業の割合が比較的高い地区であった．一番人口の多い大東町では，戸数542，人口1,969人，農業193戸，工業35戸，商業305戸．他の地区には工業，商業ともに大東下分ほどなかった．『大東町誌』，101頁．
- 10) 『大東町誌』，102頁．
- 11) 『大東町誌』，167頁．
- 12) 『大東町誌』，169頁．
- 13) 『大東町誌』，170頁．
- 14) 『大東町誌』，172頁．
- 15) 『大東町誌』，172-173頁．
- 16) 『大東町誌』，180, 191頁．
- 17) "A Brief Account of my Life," July 8, 1967. Ms. at Wells College Archives.
- 18) 筒井英雄インタビュー．
- 19) 松江北高等学校百年史編集委員会『松江北高等学校百年史』（島根県立松江北高等学校，1976），1068頁．
- 20) 『名誉都民小伝』，87-8頁．
- 21) 『大東町誌』，431頁．
- 22) 『大東町誌』，436頁．
- 23) 『名誉都民小伝』，88頁．
- 24) 『大東町誌』，432頁．
- 25) 『名誉都民小伝』，88頁．
- 26) 『松江北高等学校百年史』，1051頁．
- 27) 『松江北高等学校百年史』，1045, 1062-65頁．
- 28) 『名誉都民小伝』，88-9頁．
- 29) 『松江北高等学校百年史』，1068頁．
- 30) 『松江北高等学校百年史』，1060-61頁．
- 31) 現在は松江赤十字病院の駐車場になっている．
- 32) 『松江北高等学校百年史』，1973頁．

- 33) 松操会『母校七十年のあゆみ』(旧島根県立松江高等女学校同窓会, 1968), 4 頁.
- 34) 現在の農林会館のある所.『松江北高等学校百年史』, 1067 頁.
- 35) 『松江北高等学校百年史』, 1113 頁.
- 36) 『名誉都民小伝』, 89 頁.
- 37) “A Brief Account of My Life.”
- 38) 『名誉都民小伝』, 90 頁.
- 39) 『名誉都民小伝』, 89-90 頁.
- 40) 立教女学校は明治 10 年創立の日本聖公会ミッションスクール.
- 41) 婦人一致海外伝道局によって 1870 年に創立された横浜の共立女子神学校のことと思われる.
- 42) 『松江北高等学校百年史』, 1080-81 頁.
- 43) 『松江北高等学校百年史』, 1113 頁.
- 44) 『松江北高等学校百年史』, 1079 頁.
- 45) 『名誉都民小伝』, 89-90 頁.
- 46) 『松江北高等学校百年史』, 1113-14 頁.
- 47) 『松江基督教会百年史』, 11 頁.
- 48) “A Brief Account of My Life.”
- 49) 『名誉都民小伝』, 90 頁.
- 50) 1896 年島根県尋常師範学校女子部は生徒募集を停止し, 女子の師範学校卒業生正教員の養成は停止されていた.
- 51) 『大東町誌』, 436 頁.
- 52) 『松江北高等学校百年史』, 1104 頁.
- 53) “A Brief Account of My Life.”
- 54) 『名誉都民小伝記』, 91 頁.
- 55) “A Brief Account of My Life.”
- 56) “A Brief Account of My Life.”
- 57) 『名誉都民小伝』, 91 頁.
- 58) 日本女子大学英文学科『日本女子大学英文学科 70 年史』(日本女子大学英文学科 70 年史編纂委員会, 1976), 17 頁.
- 59) “A Brief Account of My Life.”
- 60) 岡上千代インタビュー, 三鷹市にて, 2000 年 8 月 4 日.
- 61) 『名誉都民小伝』, 92 頁.
- 62) 聖バルナバ教会は現在も新宿区矢来町にあるが, 戦災にあっており上代の受洗記録は残っていない.
- 63) 中村吉蔵は, 1906 年外遊するに際して, 保証人として河井醉茗を紹介してくれた. 河井醉茗は中村家に入出入りしていた詩人で, 女流文学者の育成に力を入れた人物である.
- 64) 『名誉都民小伝』, 91, 92 頁.『女子文壇』には毎月数十の随筆, 短歌, 俳句等が掲載されているが, 多くが筆名による投稿である. 上代の作品は採用されたかもしれないが, 上代たのという名前はみあたらない.
- 65) “A Brief Account of My Life.”
- 66) 『名誉都民小伝』, 93 頁.
- 67) 『塔影』河井醉茗追悼号, 昭和 41 年 10 月号.
- 68) “A Brief Account of My Life.”
- 69) “A Brief Account of My Life.”
- 70) 島田法子「上代タノと新渡戸稲造—上代タノ書簡を中心に」『成瀬記念館』第 13 号 (1997) を参照.

- 71) “A Brief Account of My Life.”
- 72) 『名譽都民小伝』, 94-5 頁. 『日本女子大学英文学科 70 年史』によると, 文部省英語科中等教員検定試験の無試験検定をみとめられたいきさつについて, 「1911 年に上代たの氏が, 1912 年に小山順氏が, 文部省の英語科中等教員検定試験に最優秀の成績で合格され, わが校に無試験検定を与えられる根拠をつくられた」とある. 『日本女子大学英文学科 70 年史』, 17 頁.
- 73) 『日本女子大学英文学科 70 年史』, 23 頁. 女子英学塾は 1905 年に英語科教員無試験検定取扱いの許可を受けている.
- 74) 『日本女子大学英文学科 70 年史』, 21 頁. 帝国大学で最初に女子の入学を許可したのは東北帝国大学理科大学で, 日本女子大学校第 1 回生の丹下ウメがその女子学生第 1 号になったのは 1913 年であった.